



山本 邦山

「尺八は声と一緒に。唸ったり、歓声を上げたり。単純な楽器なのに複雑な音が出せ、あらゆる感情を表現できる」。青山の録音スタジオで、氏はそう言って音を奏で始めた。

生きる「ゆとり」はアートが誘う。





父の形見である尺八を手に、ジャンルや国の違いを超えた共演で、尺八という楽器と、その音色の素晴らしさを世界の音楽界に知らしめた山本邦山氏。重要無形文化財保持者（人間国宝）となった現在も、気さくな人柄に変わりはなく、今は『ジャパン・トレジャー・サミット』とのセッションに、芸術界の発展を期待する。

写真・坂齋清 取材・文・宮澤英伸



Japan Treasure Summit Special Talk.

← 父が大切にしていた
2本の尺八の1本を
形見として
大切に使っている

—— 山本さんは尺八奏者として、日本はもとより世界で活躍されてきたわけですが、そもそも山本さんと尺八との出会いは、どのようなものだったのでしょうか？

私の家はもともと邦楽一家で、父が尺八を、そして祖母と母が琴をやっていました。しかし、父は37才のときに当時のビルマで戦死してしまっただから私にとつての父の記憶は、尺八の手ほどきを受けたことよりも、むしろ抱いてもらったときの温もりのような、そんな漠然としたものが強く残っているんです。

父の死後、尺八が数本、わが家に残されました。なかでも父がとくに大切にしていたものが2本あって、そのうちの1本は父が戦地に持って行き、そのまま行方知れずとなってしまうましたが、もう1本が家に大事に保管されていました。そこで私は残されたその1本を父の形見として、今も大切に吹いています。



やまもと ほうざん／尺八奏者、作曲家にして人間国宝。1937年滋賀県生まれ。父である山本鶴山に尺八の手ほどきを受け、都山流の中西蝶山に師事。京都外国語大学英語科を卒業後、1958年のパリ世界民族音楽祭の舞台に。以来、尺八の演奏や作曲活動のみならず、洋楽とのセッションにもチャレンジ。ジャズのトニー・スコットやゲリー・ピーコック、クラシッ

クのNHK交響楽団や東京フィルハーモニー交響楽団ほか、数多くの共演をこなし、ジャンルを超えた活動は「尺八ルネサンス」と呼ばれ、世界の音楽界に影響を与えた。東京藝術大学名誉教授、2002年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定、2004年に紫綬褒章を受賞。著書に『尺八演奏論』『山本邦山と人と竹』（ともに出版芸術社）など。



とはいうものの、その尺八も60年以上も使い続けてきたため、いささかくたびれてきました。でも、自分の年齢を考えると、私の命ある限りはなんとかもちそうなので(笑)、その天寿を全うさせてあげることが、それに恥じぬ演奏をすることが、今の私の目標でもあります。

——その大切な形見とともに、楽器は今日まで尺八一筋ですか？

子どもの頃はピアノとフルートも習わせてもらっていました。戦後の貧しい時代でしたから、経済的に祖母や母もたいへんだったと思うんですよ。ですから、このことについては今も、ふたりに感謝しています。

とりわけフルートについては、京都大学のオーケストラの指揮者を務められた山田忠男さん、その後、林りり子さんに師事しました。そして高校を卒業し、勇んで東京藝術大学を受験するわけですが、見事に不合格(笑)。

にもかかわらず後年、その私が藝大の教授になるんですから、人生というのはいくらもありませんよねえ(笑)。振り返ると、藝大の試験に失敗し、横笛を縦笛に、つまりフルートを尺八に持ち替えたところから、私の人生は大きく動き出したように思います。

人見知りせず どんな世界にも 踏み込んでいく 厚かましい性格が 幸いした(笑)

尺八奏者としての山本さんの音楽活動を振り返ると、やはり特筆されるのがジャズやクラシックといった、他ジャンルとの共演です。数々の共演を成功させることができた理由は、どこにあったと思いますか？

素晴らしい人たちとの出会いに恵まれたということでしょうね。このことに尽きるように思います。

外国語大学の英語科を卒業し、一度は貿易会社に勤めたものの、すぐに退職願を提出しました。そして恩師である初代・正派邦楽会家元なかの島雅楽しまづ之都先生しむらに言われるままに、尺八奏者としてパリの舞台に立つわけですが、そのとき有名な演奏家に興味を示してくれて、「ぜひ共演したい」とのお話をいただきました。

以来、演奏するたびにこうしたことが繰り返され、結果としてジャズクラリネット奏者のトニー・スコット、ジャズボーカルのヘレン・メリル、シタール奏者のラビ・シヤンカ

ール、バイオリン奏者のアイザック・スターン、フルート奏者のジャンピエール・ランバルなど、世界の一流といわれる人たちとの共演が実現しました。

同時に国内においても、クラシックであれば外山雄三さん、若杉弘さん、渡辺暁雄さん、岩城宏之さんといった指揮者の方々と共演させていただきました。また、ジャズにおいては原信夫さん、前田憲男さん、山下洋輔さん、日野皓正さん、佐藤允彦さんほか、たくさんの人たちと素敵な時間を一緒に過ごさせていただくことができました。

数々の共演は、こうした出会いの好運に恵まれなければ成立しなかったでしょうし、私の生まれた年代がよかつたともいえると思います。とにかく私の年代には、多くの素晴らしい音楽家たちがいますから。

——でも、たとえ出会いに恵まれたとしても、それをだれもが自分にかせるわけではないですよね？

たしかに私に関していえば、ジャンルを問わずに多くの人たちと共演を果たすことができたのも、それは人見知りすることなく、どんどん知らない世界に踏み込んでいく厚かましい性格が幸いしたのかもしれないですね(笑)。今も異なるジャンルの古い仲間と顔を合わせると、「よ

う邦山さん、今回も図々しく首を突っ込んできたな」なんて挨拶されますからね(笑)。

ときどき、どうして自分はここまで積極的になってこられたのだろうかと思うことがあるのですが、やはり「失敗してもともと」というチャレンジスピリッツというか、挑戦する気持ちを絶えず持ち続けることができたからだと思うんですね。

私たちの世代というのは何も無い時代に育ちましたから、もともと失うものがない。と同時に、ゲームやインターネットなどありませんでしたから、音楽というものが現代以上に、私たちの心を惹きつけるものであったことはたしかだと思います。

ただ、私のこうした音楽活動に対しては、否定的な意見も少なくありませんでした。とくに邦楽界というのは伝統を重んじるところでもありましたから、ほかのジャンルとのセッションを邪道だと断じられ、風当たりが非常に強かった時期もありました。30才を過ぎた頃には、その風当たりが邦楽界に留まらず、行く先々で否定的な意見を耳にすることもあって、一時期、自信を失い、心が折れそうになったときもありました。

それでも、芸術選奨文部大臣賞を受賞(1975年)したときのこと

です。私の大好きな、そして尊敬するおふたりの評論家、吉川英史先生と平野健次先生に口々に言われたんです。「ジャズをやってきたから、この賞をきみにあげるんだよ」って。「きみはジャズを通して、いろいろな音楽と出会い、曲を書き、かけがえない経験を経験しながら、音楽を学んできた。その功績に対する、これは評価なんだよ」って言われたときには私、人目をばからずに泣きましたね。

以来、自分が尺八を持ったられと共演しても「自分が主役」という気概を持って、今日まで演奏を続けてきました。そして、これでよかったんだと今は思っています。

「やってよかった」という充実感が私を突き動かすエネルギーになった

心が折れそうになった時期に自身を支え、また、今も第一線で活躍し続ける音楽家として、その原動力となっているものとはなんですか？
それはやはり、「感動を与えたい」という強い思いです。私は感動を与

えることが我々音楽家の、ひいては芸術家の使命だと考えています。だから、100%の感動を与えるという目的がある以上、自分自身は150%の感情を持って音楽と正面から向き合えない限り、100%の感動を与えることはできないと思っています。



日本というのは不思議な国で、同じ内容の演奏会を開くにしても、あ

皆さんに感動を与えることが芸術家の使命。その思いを絶えず持ち続けていたいです。

してきたので、初めての人とのセッションであっても、お互いに「感動を与えたい」という思いを演奏中に確認し合えたときには、なんともいえない気持ちよさがこみ上げてくるんです。そしてわき上がる感情が、聴いてくださる皆さんにも伝わり、そのことがさらなる大きな感動となって会場全体を満たしていくんですね。これはもう、理屈ではありません

ついには人間国宝にまでなられました。今、同じ音楽家、あるいは芸術家の道を歩む若い人たちに、伝えたいことはなんですか？

人間国宝といわれても、私はピンからキリまでの、まさにキリの方で……(笑)。それに不遜な言い方もしませんが、別に人間国宝になりたくて今日まで音楽活動をしてきたわけではありません。ただ、自分が好きな音楽で生活ができることを、そして曲がりなりにも自分の音源を残し、ひとりでも多くの人に感動を与えることを目標に歩んできたに過ぎません。

るときは満員になったかと思えば、あるときは空席が目立ったりします。とくに邦楽は、そうした傾向が強いのですが、私自身はいつでも100%の感動を与えることを第一に考えてきたつもりですから、聴いてくださる方々の人数の多少は演奏に関係ありません。

そしてこうしたスタンスで、他ジャンルの音楽家の人たちとも共演を

ん。私が肌で感じてきた事実です。

だから、とくに初めての人との共演のときは、演奏前に不安になることがあっても、終わった後はいつも必ず、「ああ、やってよかった」という思いに満たされるわけです。そしてこの充実感こそが、私を今日まで突き動かすエネルギーになったのだと思います。

そうした経験をたくさん積み重ね、

だから、これは繰り返しになってしまいますが、同じ道を歩む若い人たちにも、「感動を与える」という思いを大切にしてほしいと思うんです。カッコイイことを言っているように聞こえるかもしれませんが、実は私たち音楽家、あるいは芸術家にできることは、それしかないんです。ただ、藝大の教授を務めていてあらためて感じたことですが、芸術というものを、私の場合でいえば音楽というものを、人に教えるということとは本当に難しい。授業の前には、あれも言おう、これも伝えよう、いろいろなノートに書き出しては教壇に立つわけですが、講義も熱を帯

びてきて、「たとえば、こういう音楽」と言ったところで突然、絶句してしまうんです。なぜなら、どういう音楽であるかを伝える言葉が見つからないからです。尺八で吹いてしまえば簡単に伝えられることが、言葉では伝えられない。こういうときはいつも自分がかしく感じられて、「だから私は大成しないんだ」と、ひとり思うわけですね（笑）。

この点、たとえば東大の総長を務められた小宮山宏先生はさすがで専門的で難解なことも、平易な言葉に置き換えて人に伝えることができ。私などはすごいなあ、いつも感心させられてばかり。でもね、人って面白いですよ。芸術界の人間は、ときにうまく理屈づけができないことにコンプレックスを抱くわけですが、それを生業とする芸術界の人に言わせると、彼らにも別の悩みがある。

小宮山先生とお酒を飲みながら、「結局、人間というのは理屈だけではダメなんです。理屈を超えて肌で感じる、五感で理解するということも、とても大事なんです」なんておっしゃるのを聞くと、「ああ、彼らも同じ人間なんだな」って（笑）。そしてふたりで、「もつと人間的なところで、学術と芸術が手を携える

ことができれば、さらに豊かな社会を実現できるはずだ」という話で意気投合し、これがJTS (Japan Treasure Summit) に私が名を連ねるきっかけにもなったというわけです。

Japan Treasure Summit Special Talk

天才なんていない
大成する人と
そうでない人には
重ねた努力と
音楽にかける情熱の
違いがあるだけ

小宮山さんと同様に、山本さんも芸術界の育成に力を注がれているわけですが、今、芸術界はどのような課題を抱えているのですか？

今も名誉教授として藝大に関わっています。あきらかに芸術を志す学生が減りました。これは少子化だけが原因ではないと思います。音楽だけを見てみても、私が専門とする邦楽にとどまらず、ピアノはまだしも、弦楽器や金管楽器でもそうした傾向が見受けられます。

この理由としては、社会が便利で快適になり、それなりに満たされた若者が増えたことが影響していると思います。つまり、音楽は演奏する

よりも聴いた方が楽、と考える人が増えたのではないのでしょうか。たしかに自分で演奏するには、努力が必要ですから。

それに芸術では食べていけない、という現実問題も看過できないでしょうね。藝大を出ても、全員がその道のプロとして生活ができるわけではありません。ただ、こうした状況を「才能」という言葉だけで片づけ



学術との交流で
生まれる何か。
その何かを形にし、
次の世代の
挑戦の場へと
つなげたいのです。

るのは、やはり間違っていると私は思います。

私が尊敬してやまない、ある偉大な先生がいらっしやったのですが、先生は目が不自由だった。しかし、頭の中には何百曲と入っていて、私も共演をさせていただいたことがあったのですが、今も当時のレコードを聴くと愕然としますね。先生の美しい声に対して、私の音はあまりにも

ひどい。自分が惨めな気持ちになっ
てきます。

これは先生と練習をしていたときのことなのですが、あたりが暗くなってきたので、「先生、電気をつけてもいいですか？」と聞いたんです。すると先生は、「楽譜を頼りにするのもたいへんだね」とおっしゃった。もちろん、これは私に対する気遣いの言葉で、私もこのときふと、日頃思っていたことを口にしてみたのです。「先生はすごいですね。たくさんの曲を体で覚えていらっしやるから、出される音色が全然違います」って。そのときの先生の言葉を、私は忘れることができません。

「私は目が見えない分、音楽に対する思いは強けれども、それでも失敗はあるよ。だからこうして、それを忘れないためにいつも歌っている。私はね、天才なんていないと思うんだ。大切なのは努力と、どれだけ音楽に情熱を傾けられるかじゃないのかな」

先生がご健在の頃のできごとでしたが、この言葉に私はどれほど勇気づけられたことか。そして今、私自身が人間国宝と呼ばれるようにまでなつてあらためて思うことは、先生の言葉に嘘偽りはなかったということです。少なくとも音楽界に天才は

ジャパン・トレジャー・サミット

って何？

山本邦山氏が理事を務める一般社団法人として、2009年10月に設立。学术界（理学工学・生命科学・人文社会）や芸術界（美術・音楽・舞踊など）からトップリーダー「独創人」が集い、寄付文化、社会的投資文化醸成に取り組む。おもな活動内容は以下のとおり。

- 日本の学術芸術活動の素晴らしさやそれらの活動を牽引する各界の「独創人」の生き様、志、素顔メディアを通じて発信。
- 次代を担う若者たちに本物の学術芸術を感じる機会を提供。海外から日本を訪れる人々や、世界中で活躍する日本人を介して、日本の学術芸術の魅力を世界に伝える。
- 多様な人々がそれぞれの立場で、学術芸術活動に関わり、支えていけるようなスタイルを提案し、次代につなぐ支援コミュニティを創造。
- 「独創人」が学術芸術活動に専念しながらも、社会とのつながりを深めることができる環境整備。
- 寄付金税制・相続税制、公益信託制度など、寄付金市場の成長の礎となる制度設計について提案。
- 寄付金募集や支援コミュニティ形成、学術芸術活動に関する情報発信などのためのシステムインフラを企画・提案。

独創人の方々（五十音順／敬称略）
 浅島 誠 ————— 生物学者
 今藤政太郎 ———— 長唄三味線演奏家
 大垣眞一郎 ————— 工学者
 金澤 一郎 ————— 医学者
 北澤 宏 ————— 工学者
 桐野 豊 ————— 薬学者
 小柴昌俊 ————— 物理学者
 小館香椎子 ————— 工学者
 小宮山 宏 ————— 工学者
 郷 通子 ————— 生物学者
 澄川喜一 ————— 彫刻家
 富山清琴 ————— 地歌箏曲演奏家
 野村四郎 ————— 能楽師
 松下 功 ————— 作曲家
 村山 斉 ————— 物理学者
 山本邦山 ————— 尺八演奏家

※2010年4月現在

ジャパン・トレジャー・サミットについてのお問合せは
 『ジャパン・トレジャー・サミット事務局』
 URL www.treasure-summit.jp

いないと、私も思います。では、大成した人とそうでない人の違いは何かと問われれば、それは積み重ねてきた努力と、音楽にかける情熱の違いだと、私も思っています。

Japan Treasure Summit Special Talk.

優れた芸術には豊かな人間性を育む力がある

———これはたいへん不躰な質問だとは思いますが、私たちの生活にとって、なぜ芸術は必要なのでしょう？

私は音楽家なので、音楽で回答させていただくのなら、私たちの生活はもはや、音楽なくしては立ち行かないところまでできていると思うんです。今はテレビや映画、そしてDV

Dなど、多くの映像が日常生活に密接に関わっていますが、こうした表現もBGMなくしては成り立ちませんよね。

それにこの瞬間も、性別や年齢、国籍などの違いを超えて、多くの人たちがきつと、自宅や移動中の車などで好きな音楽を聴いていると思います。そしてその音楽に癒やされ、励まされて、豊かな人生、豊かな社会につながる一歩を踏み出しているのではないかと、私は想像するわけです。

立場上、多くの方々とお会いする機会があるのですが、前述の小宮山先生もそうですけれども、音楽を含め、芸術をこよなく愛する人というのは、総じて包容力があり、柔軟性に富み、そして広い視野を持たれた方が多いように思います。JTSをきっかけに、各界で活躍されている

方とお話をしていても、このことを強く感じます。やはり優れた芸術というのは、豊かな人間性を育む力を持つっていると私は思うのです。

物質的に豊かになっても、精神的な豊かさがなければ、それは真の豊かさとはいえませんよね。そしてその精神的な豊かさに寄与するという点において、芸術の存在意義というものがあるのではないのでしょうか。

しかし、自分自身を客観視するのが難しいのと同様に、芸術界に身を置く人間は、自分たちの活動の価値や生かし方を正当に評価できないところがあります。こうした点においては、むしろ芸術以外の世界に身を置く人たちが、冷静に見極めることができると思うんですね。

実は私がJTSの活動内容に賛同するのも、学術と芸術の交流によって生まれる新しい何かに期待すると

ころが大きいです。それがなんなのかはまだ見えませんが、きっと何かあるはずだし、そうしたことをみんなで探求していくこと自体が、とても建設的なことだと思います。そしてその結果として、芸術界に身を置く若い人たちの活躍の場がさらに広がれば、こんな素敵なことはないですよ。

そのためにも私自身はこれからも、邦楽というのは日本人にとって大切な文化遺産なのだというのを、大和魂とともに伝えていけたらと、そんなふうと考えています。そして同じ音楽の道を志す若者たちには、私の人生がそうであったように、音楽を通じて多くの人たちとの出会いが、きつとあなた方の人生を豊かにしてくれるというのを、今後の活動を通じて表現していけるよう、これからも努力を続けていきたいと思っています。